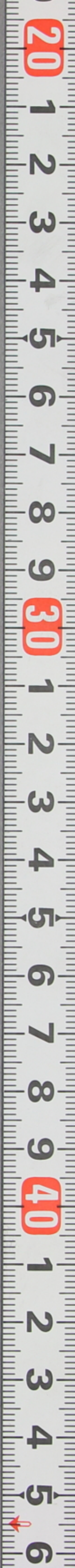




繪本漢楚軍談

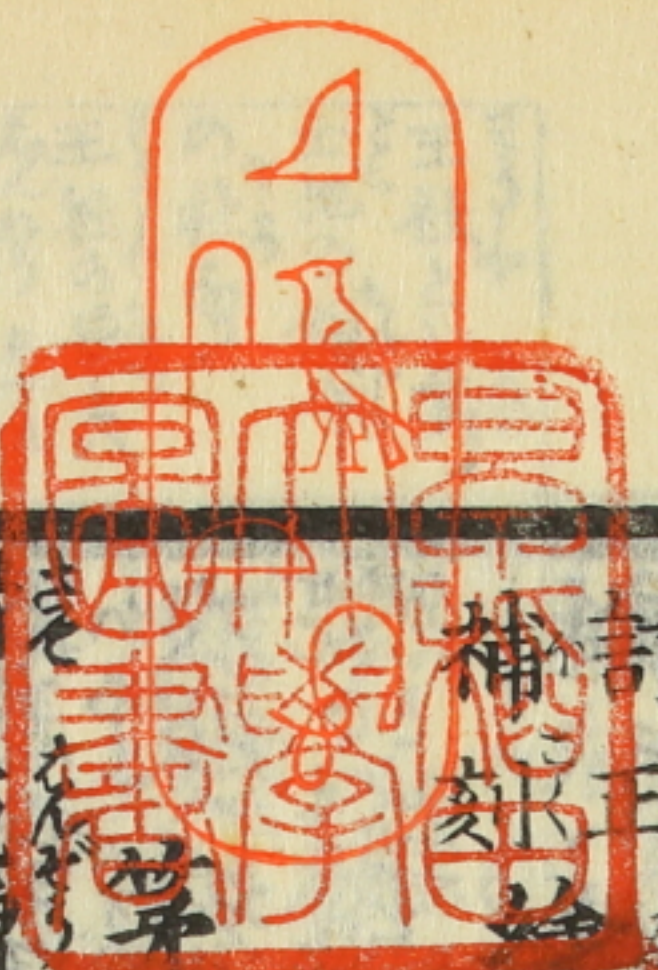
四

~ 13
3565
4



門 13
號 3565
卷 4

訂正 增本漢楚軍談初輯卷之四



東都 蓮池庵 鷓鴣貞高纂述

七回 南淮浦鍾離昧得君
楚國の爲不能楚の後と立玉んと思へり此義を悟り玉へを諫の言の
項梁の實のものと知覚范增の云けり通軍師の尔へ違ふ其心を合
たりも范増を推尊で軍師と即時の八友人の壬配して楚王の子孫を
尋りたりんと爲さるけるが楚國へ始皇帝の嚴しく城なきを其子孫の遺
更々國脈既の絶果て尋訪言跡も多し程の衆人空しく立歸りて

早稲田 大學 図書館
昭 34.6.3 受
藏 書

其言曰報しけし項梁の鐘離昧の命に緊く尋求し鐘離昧の
 其命を養て心の中思様楚國の先小秦の為に強く痛らぬ敷と及て城
 遺りて支るる適遺り子孫在とも遠く逃に藏住て必き城下の市中繁
 冒の地あり下定め田夫野人とも名を埋身と忍び山里の中を在り
 せりと山林田間遠所近所と残る隅を尋まざる思ふ者もけり
 餘り求め難故或日南淮といふ浦曲へ出て見るゆゑ多くの童子が集り善
 敗居りし何事と争ふ一人の童子を起鬼て引捕へ多くの童子の中
 取巻散々の打擲を打り童子の其容貌清秀の尋常なき美麗なる
 衣服の垢付破るるを着て哀まらるる此邊の在る童子に似て飛んで自
 然と尊威を保如し亦て多くの童子の小打ても更の恨と憤色も鐘
 離昧の情と這を看て何なる奇異者なりと推量彼童子を路の小陰密

王社の其
 土地の鐘
 の社あり
 王社の長と
 神領の庄官
 の如きもの

招き何故他の童子等が其方一個を打擲せりと尋求し童子が答て
 曰く彼童子等へ此土地の者なり皆父母の在りし我の獨孤して王社の
 長が奴らに平生彼等の侮に賤らるる我先程彼等小對し汝等
 父母有と以て我意を行へとも悉く百姓の子らも我孤子も人の家の奴
 られども其本は王者の子孫なりと云ふを彼等怒りて此を打擲せりと
 語るを鐘離昧の打聞て汝王者の子孫と云へ必所以の有らん先祖の
 姓氏は何と云ふを問は童子の之に答て云我幼穉時より此所の住人
 王者の子孫と聞か先祖の氏も名も知らざる陳と見え鐘離昧が再三
 責問けし童子の急を逃んと為るを攔住せ低く様汝が容世の常なき
 後の必貴るべし今も実を露して我を生れ我のまに汝を以て君とせんと
 道理を責て曰けし童子も今止まら鐘離昧の向ひ我今年齡六十三

繪本漢製軍諺初卷之四

文彦堂藏

此所へ來りてより己の八年の及ぞう嘗老母の申せし汝ハ斯く愛落
 下り楚の懷王の嫡孫を必む他人の知らざると云ふ事の在りし此故を以
 自然王者の子孫を多しと説話を聞て鐘離昧ハ此上も喜びて
 急ぎ童子を抱懷其後馬の打策て王社の長が家小行童子の母を出せ
 云の長ハその故を知らざれば驚き惶曰けり小人山村の農夫也國の法令ハ
 背する覚ハ聊いらぬ何故ハ斯罪せらるる支免玉と言譯ぞ鐘
 離昧ハ打笑ハ汝を罪せん爲るるむ只速此童子の母を出せ云けり王
 社の長ハ戰慄老母の衣服を更させ引て草堂へ出けり鐘離昧ハ近
 寄り童子の來由を尋問初程の隱けり再三再四及ぶ程小膚の貼き
 けり舊き衫を取り出此を見てこそ知り玉と渡せば受取鐘離昧より見え
 襟の上何れ文字の有ける甚分明るざれば日影に向て伺ひ見るハ楚

今ハ其の嫡孫ハ心楚の太子の夫人衛氏と書せり其外ハ國寶の記録
 覺し書付あり斯く疑ふ所ハ地ハ拜伏して君臣の尊卑を分れせり
 王社の長と諸共ハ守護して淮西へ回り事の子細を告げし項梁大ハ
 喜びて吉日を擇心を立て君と傳弼て其を懷王と稱しけり此ハ楚の
 後を立てると普く人ハ知らせん爲の祖父の謚を稱とせり後ハ義帝と申
 せし此懷王の御事也時正ハ二世皇帝の二年六月の事なり其
 後母の衛氏も王太后と尊稱し今て項梁ハ自武信君と稱し項羽
 大司馬副將軍と范增を軍師と李布鐘離昧を都騎と英
 布を偏將軍として桓楚平英を散騎と以下の諸將も悉く封賞ありて
 酒宴をり上下共ハ喜びて王社の長ハ報として黄金綵帛を多く賜
 けりて其を送らせりけりけりけり程ハ楚の勢ハ日々夜々盛なり諸國の

豪傑風を望み來服せんとす。又曰。爰は楚國の大將の宋義とて。者
 のりけり。江下の兵を聚けるが項梁が楚の懷王を立する由を聞及び三萬
 餘騎を率ひ。馳來りて加りけり。項梁やがて對面し引て懷王を見下り封
 卿子冠軍と號さし。奏を伐計略を議し。さうける。さより先は東陽の陳
 嬰と云者のり。故東陽の縣令の吏ありけるが。縣中み居て信謹る。さ
 人皆稱して長者とせり。その項天下蜂起して奏を伐んとする程は東陽の少
 年ども其縣令を襲殺し。數千人を聚り。長を置んとり。其機み當
 りの無き。一途の請ふて陳嬰を長とせん。と為せし。陳嬰謝て不能とて
 一向是を諾ぬ。遂に疆のまを立徒黨の長と為せし。縣中の子弟
 馳聚り二萬餘騎を成あけり。斯くいふ少年どもは陳嬰を以て王と
 大義と揚んと議し。けい。其母諫て曰ける。様我汝が家の嫁り。さ。先古

嘗て貴りの有りと云へばぬ。今と暴の大名を得ん。い。さ。不詳
 多。誰人の多とも従ふ。さ。有のあ。今せん。事。これ封候を失む。さ
 事敗ると亡場ら。是。両金の計策と論せ。陳嬰う。さ。出。軍吏の
 謂ける。項氏の代々將家の。殊に楚國の勲功あり。今江東の義旗を揚ら。さ
 我輩も今より。項氏の屬順ら。さ。奏を亡てん。又。さ。説示せ。さ
 衆人實のものと諾ひ。さ。此趣を項梁の申。さ。喜びて。之。重用の。さ
 猶も諸方と拘り。許。許。此。此時項梁宋義等。軍議を。さ
 ちて居。さ。宋義。さ。云。今淮西の楚の地の。さ。都。さ。立。さ。内。さ
 不如陳嬰が屯せ。許。許。旗を。さ。進。さ。彼。さ。の。さ。要。さ。を。さ。根。さ。本。さ。と。さ。其。さ。後
 奏を伐玉の。進。さ。の。さ。攻。さ。破。さ。る。さ。退。さ。さ。の。さ。又。さ。守。さ。る。さ。べ。さ。此。さ。義。さ。如。さ。何。さ。と。さ。説。さ。論。さ。せ。さ。項
 梁。此。義。を。さ。然。さ。と。さ。乃。さ。ち。兵。を。さ。進。さ。め。さ。先。さ。陳。さ。嬰。を。さ。楚。さ。の。さ。國。さ。の。さ。上。さ。柱。さ。國。さ。の。さ。官。さ。と。さ。し。

續補漢書卷之四 陳嬰傳

五縣の封じて之を授け、叔懷王と諸共の町昭不都を定めけり。斯る所へ一隊の勢馬蹄塵をのびて出来たり。旌旗の動處、紅の光の如く、又劍戟の閃時、紫の氣生じけり。范増望見て驚歎し、今來る勢、尋常の如く、此中の必天運を得ざる人、とて觀察居る。其一人馬と躍らせ、出來りける。相貌、堯の如く、似て、隆準龍顏、最尊し。范増頭を傾つ、此人こそ天運の當り、眞の天子とあるべし。我誤まると、心中の相久しく後悔し、誰ぞと問ふ、芒蕩を、白蛇を斬て、豐西の十萬の勢を聚る。沛公劉邦と申しけり。今項梁、楚の後で立る由を問ひ、程の部下の復候、嬰樊噲等と共、力を援んと出來り。今項梁、大の喜ひ、持成けり。余も此時、淮陰の韓信と、勇士出來りて、用ひらんと願ひ。武信君その容貌の瘦衰へ、と賤そを用ひ、まこと云ける。范増累の

勸つ。此人外面、賤しげなれども、肚裏、深き智謀のらん。已ふ來て見へば、即ち留りて、用ひ玉へ。若き王の賢を求る路を塞み、等しき云けり。漸く之を執戟郎とあり。部下に住て置る。是より先、韓信の淮下、在て、魚を釣ひ、貧ひして、食み飽ね。洗ひのを業とす。漂母は是を憐み、毎常、飯を與へ。程、韓信志を感じ、我後、富貴あるべし。厚恩を謝んと云へ。漂母は行々、大の嗚呼、大丈夫の一飯を得る助も無り。我王孫を哀れ、食をののり。のり、何の報せ望む。と言葉、まるごと言ま。或時、釣る魚を携へ、市の市、とす。時の任、俠少年とす。是を辱めんと。汝へ常、劍を帶る。何の用の立んと。おれ、且つ男の如く、劍と抜、只今、我を刺殺せ。若能とす。我、膝の下を潜し、傍若無人、云けり。韓信、兎角の曲辭、もく、膝の間より、潜り出、市の人皆嘲笑ひ、臆病者と嘲りける。余も相人の許員とめ者



真勇更まゆり小こ厚あつと
念ねんととせせと

繪本漢楚軍談初輯卷之四

○文溪堂藏

韓信と見て云けり。君は王候の貴相なり。當り天下の元師と成玉て富貴を
心のまゝの有るべし。と語まは韓信打笑ひ我貪く七日々の食資も無き
身の。何の富貴を望まんと。回辭て其儘別。此時始て楚の仕。身は
執戟郎のけし。常の不足の意あり。此後漢の仕。大元師の任せ。齊を
亡。楚を破り。漢の天下を定り。專此人の力。名を後の世に傳えり。

第八回 項羽震勇破秦強兵

介程の項梁の都を盱眙の程し。勢ひ盛なり。宋義劉邦陳嬰
呂臣此を一隊の大將と。其外數々の名將を。爰の會合。秦を伐計
策を運。威風遠近を震動。此由咸陽へ聞えけり。權臣趙高大將
驚老將軍章邯を召て之と議。近年山東擾亂。盜賊諸國の蜂起
あり。黔首を悩。掠と聞。左程の吏の有り。と打捨置。豈圖んや。

項梁の楚の後を立。田氏の族の齊の起り。又趙歇の趙の王。其外六國の後
亂も。皆其國々起り。立其上。彼を合。各々心せ。一。と近。京
攻上る。諸國の早馬波を撃。急を告。己時あり。若忽如。置。由敷
大事。及。み。足。下。誰。も。此。強。賊。を。速。小。誅。伐。を。急。者。や。の。急
速。彼。所。小。馳。向。ひ。を。誅。滅。せ。る。べ。し。と。以。て。章。邯。回。答。し。最。小。も。曰。ふ。如
く。其。某。も。天子。小。奏。し。請。兼。て。も。打。向。へ。ん。と。思。ふ。所。小。夫。を。幸。ひ。小。閣。下。の
命。を。蒙。り。況。て。兵。の。神。速。を。貴。と。り。の。急。ぎ。彼。所。小。發。向。し。捷。軍。を。報。ひ
へ。ん。と。即。時。小。啓。行。の。用。意。と。丞。相。李。斯。が。嫡。子。を。李。由。并。小。司。馬。欣。董
翳。と。い。ふ。三。人。の。勇。猛。無。雙。の。大。將。を。伴。ひ。三。十。萬。の。勢。を。引。卒。し。函。谷。関。より
進。發。す。時。小。章。邯。思。ひ。け。り。六。國。の。子。孫。時。を。以。て。皆。其。故。國。小。蜂。起。せ。り。
先。其。易。き。を。夷。け。て。其。後。難。を。伐。小。不。如。と。魏。國。の。境。へ。推。寄。る。魏。王

咎ハ小勢ヲ出テ戰ふこと能ハねバ堅ク要害ヲ相守リ齊楚ノ二國ハ使
 立急ニ救ヘん夏ヲ求ヒ齊王田儋ト謀ヲ聞兵ヲ引テ打出ケル楚懷
 王も是ヲ聞介テ武信君項梁ト計策ヲ商議シテ一族ノ大将項明ハ
 三萬餘騎トシテ漆テ魏ノ國トモ救ヒシ章邯救ノ來ルヲ見テ司馬
 欣ハ齊ヲ防ガ董驪ハ楚ヲ防セ自ら後陣ヲ續ケル齊王田儋ハ陣ト
 進チ齊秦ノ兵ハ相逼リ先司馬欣ハ兵ヲ分チテ兩旁ノ出際ハ
 伏置テ纔ハ千餘ノ騎兵ト卒ニ迎テ戰ヒケル程ハ齊王田儋小勢ヲ見テ
 大ニ悔リ勇傲鼓ヲ鳴リ責ク是ハ司馬欣ハ陣前ノ馬トシテ棄出シ大
 逆叛謀ノ輩輩トシ我上國ノ天兵ヲ防テ見よト詈罵ハ齊王田儋大ニ
 怒リ秦ノ二世ハ暴惡メ天下ノ民ヲ苦ヒリ夏夏桀殷紂ハ猶勝レリ故
 今我天ノ代暴ヲ除キ先祖ノ為メ舊怨ヲ報ヒシク汝等トシテ紂ヲ助

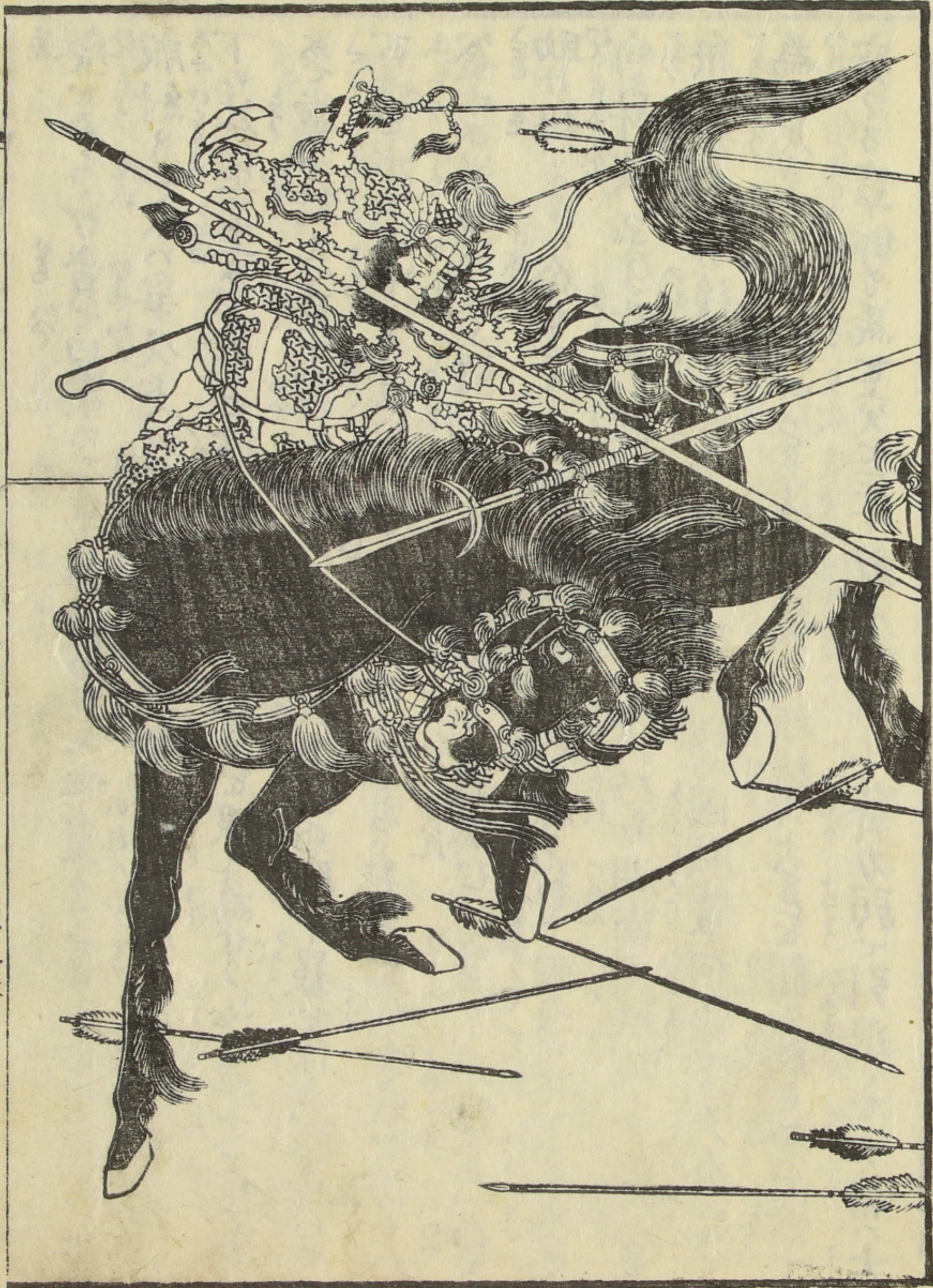
悪逆ヲ行フ罪人多ク早く味方ニ降参セヨ若然ラズハ精魂ヲ留テ呉人と
 戰ヒ回リ面もあつて突テくまハ司馬欣ハ偽負散々ハ多ク逃走ス
 齊ノ軍兵ハ勝ハ乘リ短兵急ハ追蒐ル司馬欣ハ思ハ圖ハ敵ノ馬蹄ヲ
 疲シ時分ハ一齊ハ馬ヲ回シ時ヲ奪ヒ俄ハ金鼓ヲ打鳴リ左右ノ
 山ノ際ハ伏勢動起リ立兩霰ト箭前ト放テ齊王馬ヲ棄回リテ計略ハ落
 たる勢ト一圓テ引取リ味方ヲ制ス其端ハ流矢來リテ齊王ノ胸ハ穿
 ち中リ一程ハ馬ト轉ヒ落ケシ司馬欣疾視駭トテ遂ハ斬レ
 たり斯リけり齊ノ兵何リ以テ接戰ハ皆散々ハ擊ラレ右往左
 往ト敗走ケル此時ハ楚ノ援兵ノ大将トシテ項明ハ魏國ヲ救ヘんと
 士卒ヲ激シ進ヒテ秦ノ大将董驪ハ無端半途ハ出ル小ハ兩
 陣金鼓ヲ鳴リ一旗ヲ進チ矛戟ヲ接ヘ時ヲ争ヒテ戰ヒテ秦ノ兵ハ

繪本漢書楚軍談初輯卷之四
 文獻堂藏

免るつれ。ちやう。遠路の疲墓々々勇ねい得ず。所と難立る。厲しき楚兵の鋭鋒を何うか
以て堪へん。鬼やぶりのとて散々。三十里ほど引退く。勝不棄。項明へ何所まで
と追ひつ。斯る所へ章邯の後陣の新手を引具し。勢猛烈。駈來り。李由を
先に進せし。董翳が敗軍を救ふ。楚の勢。楚の勢。長追して。一日一夜戦ひ
勞。楚の勢。新。不出。會。心。矢。思。身。鐵。石。の。遂。不
之。操。立。ら。引。色。と。見。へ。大。將。項。明。大。音。の。逃。る。の。斬。て。音。を
莫。退。と。駈。回。り。士。卒。を。勵。一。指。揮。ま。る。と。李。由。の。馬。と。鬼。と。を。一。刀。斬。落。其。
楚。の。三。萬。の。軍。勢。も。残。少。る。討。ま。れ。右。往。左。往。散。乱。せ。り。斯。り。一。程。の。秦。の
大。軍。が。勝。微。う。勢。の。山。岳。も。崩。て。幽。谷。と。埋。潮。の。激。て。巖。石。を。擊。つ。形。勢。の。て
猛。烈。魏。の。國。へ。真。騫。の。攻。よ。ま。る。魏。王。咎。の。救。ひ。の。勢。の。敗。る。由。を。洩。聞。て。
右。に。此。孤。城。守。ぐ。一。旦。此。地。を。僻。ん。と。西。の。門。より。潛。出。楚。國。を。さ。て。走。り。け。り。

章邯の遂に魏を平げ。東阿の陣を中と。勢の諸國を震動せり。此沙汰楚の
國へ聞へり。懐王の武信君項梁以下の諸將を召して。足下等既の聞
如く。秦の大軍齊と我枚の勢を打破り。魏の國を平げて。勢の乘り。此所直の押
寄來らん。如何計を用ゆ。思ふ所の有ん。各々隱さば。申さば。命の
項梁。秦の。一。時。の。利。を。得。る。と。何。程。の。支。の。ん。臣。先。自。打。向。以。彼
誇。て。情。を。襲。ち。之。を。誅。し。と。函。谷。関。を。打。破。り。直。の。秦。を。平。ぐ。御。心。安。思。召
ま。即。時。の。行。軍。の。用。意。を。備。へ。項。羽。は。范。增。其。外。の。諸。將。と。共。の。惣。軍。勢。二。十
萬。騎。を。引。卒。一。夜。を。日。の。繼。て。馳。つ。東。阿。の。麓。の。押。寄。せ。り。章。邯。が。屯。陣。を
三十里程相隔。塞營をうへて。屯せり。翌日東阿へ押。項羽一隊の馬を
ま。り。秦。の。大。將。章。邯。の。遇。て。云。へ。言。支。の。り。と。大。音。聲。の。呼。れ。大。將。章。邯。
衆。々の。猛。將。勇。士。を。左。右。の。備。門。旗。の。下。の。馬。を。出。ま。を。項。藉。へ。眼。を。瞋。し。と。

項羽自刎
章邯之戰



漢書卷九十四
項羽自刎
章邯之戰

飛廉と
思來の
二人の
逆臣の

聲をのりけ青て曰秦の二世が無道多父始自王より甚し古昔の夏桀
殷紂も之の争及ぶに又趙高が大悪多飛廉思來の十倍せり天が
下の蒼生を生まぐらふと彼等が肉を割齒を恨と為せり汝輩之を悟ら
よて黨を結んで民を害も故の今我天と人の心は應り暴を除き残を拂つて
百姓を水火の中より救はんとも今汝等の時を去らば天の遠く我を防ぐ
釜中の游魚の如く羅網の如く鳥の似たり最憐むべし笑へ早降らば命を
助け得るをせん介せよと晋の章邯の大怒り我上國の天兵を牽來て
向ふ所破らざる所なく戦て不勝多汝乃ち湖南の用賊を烏合の
衆を聚り楚の後を立黨を大逆謀叛の國賊輩何を以て天人の應と
為の足らんや最嗚呼まに欺笑の項籍の志を聞も敢て鎗を燃て
突くる章邯も馬を交て三十餘合戦ひが膂力弱て引退く項籍は士

卒を駆激まし逃まをりて赴所の章邯が部下の大將李由路を欄りて防ぎ
戦んとまらや項籍は眼を瞋り汝何を邪らるぞと霹靂の如く一聲
叫びけま李由は戦慄恐懼て棄る馬も覺もく二十歩計退去り項籍
烏鎗の駿足不鞭を如急の趨り鎗を燃りて李由が背を胸先までも突通
さんと勢ひ込で見へる所へ司馬欣董驪二騎揃ひてのり馳來り李由
中を相隔二十余合を戦ひける介も項羽の更にもせむ猛威を振る戦ひけ
司馬欣董驪力弱り遂に馬の鞭を加へ後をも見ざりて逃去る項羽は火急の
下知を傳へ何所へ逃とも許さると敗るを追撃進め項梁へ此由を傳へ聞窮
策へ却て猫を喫重地へ入て失ゆるべし汝等行て救へる乃ち英布桓楚
千英の三將の五千余騎を授け三人等馬を馳せ項羽が力を扶る事
秦の勢へ散るの危破らるる士卒を觀し討まらる章邯等へ虎口を逃れ五

繪本漢楚軍謀初輯卷之四

五

六

十里引て陣を取り諸將の向て云ひける楚の軍時勢盛なり力とて以て戦
 難一故を以て考ふる正の緩兵の術を用ひ彼が大将驕を生下士卒の心も憤
 上下油断をもを伐ん然る時一戦の功を成さる疑き今若力を専
 任と項羽と挑戦人の死と益あるまると令を出し諸將を戒ち固守を
 出さずけり今て項籍の思ふ依る秦の軍を打破り勇て本陣へ立回り項梁の
 見て合戦の様捷軍の趣意と細密の語明日いつともて大軍を二隊に分ち秦の
 陣を打破ひんと曰は項梁の大悦び彼章邯徒の置く名の高けきも羊
 老力乏くを物の用の立なきを我為飛へ出陣し諸將と力を一み悉
 皆を打取んと酒宴と設諸將を待成歌舞管絃の興を添へ酔を尽
 きて次の日朝未明より起出り項籍と中軍と英布を右の備へ沛公劉
 邦を左と備武信君項梁の諸將を従て後陣のとへ打せけり斯う

程の楚の大軍金鼓の聲天の響音の喊の声へ地を震ひ秦の陣の推寄れ
 大将士卒諸共是を痛く攻立りて戦ふ氣力も無り程の一支部
 支ぎり陣屋を捨て逃走る楚の軍勢へ勝れ無く追逐れ
 秦の軍隊へ荒け乱れ三方へ逃走る章邯へ定陶へ志て馬を馳せ司馬欣
 董翳へ濮陽へ走り李由へ雍丘へあらしむ楚の大軍へ這を見て三千の
 分きて趕逐る項籍の自雍丘へ落行敵を追殺し遂に李由を追つて
 之と鎗を交へり戦ひ三合るが李由を一鎗の刺殺し残卒共の追打
 けり沛公劉邦の勢を馳司馬欣董翳を追撃城陽まで到りける一日一
 夜も三百里の路を想ひ馳けし蕭何諫て云けり古より窮寇へ追と
 言さる若敵の伏勢ありて思ひも寄を起さし逃を以て勞を伐へ十分疲
 乏味方の兵も如何と戦ふ言不暫時此處の御陣を留居ら其

変を御覽せしむり云へば布公最もとて塞をあらしと屯せり。士卒の
 嚴しく令を傳へ堅固の四營を守らば。敵の容子を見合せし英布の章
 邯と追慕ひ士卒を駆て餘きを隙間より追討されば。章邯へ一度も
 返さず合軍を定陶の城に逃入士卒を制し門を閉固く守りて出合を英布の
 城外の陣營に日々夜々挑む。戦ひを催せども。章邯は令を傳へ士
 卒を嚴しく戒めて更に出ざりける。程の英布もまじき様多くて度々日數を
 送りける。

第九回

章邯以緩兵計項梁

爰はまの齊の國少の國王田騰死せし程の田假と云者自立して齊王の位に
 即ける。先の田儋魏の國へ救の爲に出しと。弟の田榮と司馬の龍且具
 して虎口を逃れし漸く東阿まで來りし。章邯手痛く追ひし。戰死と

極り止りて奮撃突戦する所。項梁が勢來り救へ必死の命を助りて齊の
 國の田假自王となり。田角を以て丞相とす。田角は弟田間と大司馬と
 して有りける。程の田榮大なる這を怒り遂に是等を追退け。田儋が子の田
 市を立てしを齊王と爲し。今も田假は楚へ走り。田角は趙へ走り。
 此時の亦項籍沛公英布等が秦の諸將を打勝て。是を三所へ追込て攻
 圍居る折る。武信君項梁へ齊へ使を遣して。俱に戮力長驅て遠進し
 秦の勢ひを兼らう。秦の天下を打亡し。二世を誅して民を謝せんと云せし。其の
 田榮等が田假を殺し。趙の田角兄弟を殺し。後にも乃ち兵を發して。後
 貴國へ田假を殺し。趙の田角兄弟を殺し。後にも乃ち兵を發して。後
 有ける。此由を項梁へ打聞て。田假の元を餘國の王窮し來りて。我の徒が
 我之を殺さる。如何の事も不忍とて。遂に是を殺さねば。況て趙へ言送る

然ハ齊の此故の兵を幾さる楚を助け居る自國を守ける是れ小を
 項梁の大軍を引卒一即ち東阿を打立て章邯が籠城居る定陶城へ押寄
 る英布の遙小出迎へて本陣へ案内し是れ晝夜種々と戦を催わを
 とも章邯さし出合は様子細密の語りけし項梁聞て打笑ひ秦の軍勢
 カ竭術計又窮りて此城中逃匿する正の亡る時あり一救の勢の來らぬ
 前速く攻落さん何徒日を送らんやと支も無げ云けし英布の顔色を
 正くちて章邯一度戦の打負うといども人馬元來雄壯る介を味方が
 挑りも出て戦へざるの恐く謀畧有るらん今性急の攻玉を彼謀裏の
 陥入て味方難美及ぶべ返々も利ありと云へ項梁叱て云汝一隊の大將の
 備りも謀慮も此程の小城一ツを攻んと何空く日を送るぞ今我大軍
 已の來る無用の舌を動し七味方の銳氣を預まるとと諸軍を下知

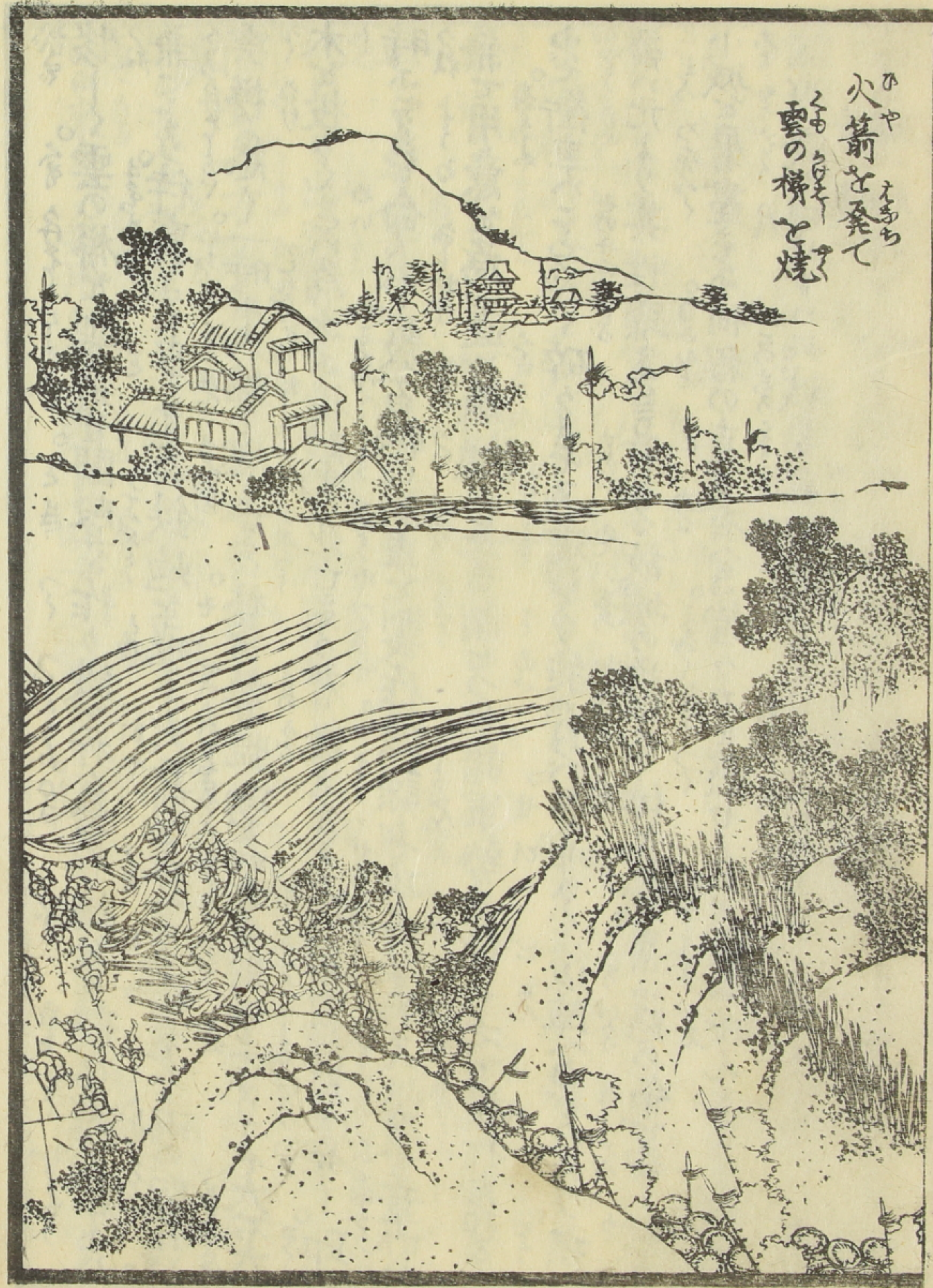
倏々。雲の梯を製造せ鬪聲を作り鼓を打息を継ぎ競ひ進む城中の
 兼てより待稟する事あり鉄炮を飛し火箭を發り介が雨の如き
 雲梯悉く一時の火焰と燃上り楚の勢慌迫と四方の櫓の上より大矢
 木を投ぐは為之の推撃れ死亡する者數あり項梁の益怒を發し即
 時小を命どり數百輛の衝車を製作鼓譟して攻上り又此度も章邯の
 兼て用意を為置は鉄鎖の長き鎖をつり諸軍勢の命と之を投打する
 衝車はこぼれ砕くも又進む能はる是非後陣へおれけり項
 梁の元より其性躁き者あり故城の落る体を見て累々怒の氣を發し斯
 小城を屠盡す何程の支有る皆々力を盡せし火急の攻んとする程の
 諸將議て曰けり此城要害堅固るは力て以て攻がしと云く陣を退け
 らる城へ細作を入らして時節伺ひ計畧して陥之しん味方の損亡



新編海防軍談初編卷之四

十八

新編海防軍談



ひや
をもち
ひや
をもち
雲の横と焼

新編海防軍談初編卷之四

新編海防軍談

無るべし。若余甚とて此處の大軍久く屯せし章邯果方の忌むる時節を
 密に窺ふて夜討せ爲んも圖らざる也。然らざるも陣中へ用心するの如く
 不慮の禍ひ有ん時後悔と云ふ及びと云ふ項梁大に怒り我會社首の義
 兵を發し天下を縦横まるといふと向處の敵も者なり。量るべし此等の小城を
 攻落さんる又何の難き事有なむ。章邯數回固度の戦ひ入馬大半討せ
 たるべし我名を聞ても膽を冷し魂を失ふべし。然るも何ぞ城を出我が陣中を却
 まんや余のさ深く量ると最善顔云けし。宋義進出て諫て云古昔よりて
 言まざる戰勝而將驕卒惰る者へ敗ると今味方の士卒を見らる少く惰の
 色を現る余る秦の兵へ日々竊に益と云臣此を以て爲君の畏之と殷勤の言
 項梁ハ少も是と不聽の事却てもまを遠ざけんと宋義を齊の使とせし宋義
 頓て出立し道を齊の使者よりける高陵君頭へ遇けし。之の問て曰けるハ

我推量る足下ハ武信君を見へんと使者來る人らも高陵君
 回答して實の然りと云けし。宋義重て是れ曰我武信君の動作を見るハ
 大将驕りと卒惰る必む敗る先兆あり。足下徐々行時ハ此禍を免らん若疾
 行ハ禍の傍杖打る。支有さんと教示て南北へ別且けり。余ても其後項梁ハ
 諫る者も無程ハ秦軍恐る足らざると日々夜々の酒宴をさし驕娯居り
 けし。下下の勢も急荒し更ハ用心爲さる程ハ章邯ハ飽まざる緩兵の術を
 用ひ敵の心を驕せし時分よりと思ひけし。或夜精兵を揮出し皆々口を杖を
 叩ませ二隊に分し忍びやくハ城門を操出さず楚の軍中を窺ひ見し。燒并る
 篝火ハ幽ハ其所残されど白晝の酒宴ハ醉るや上下共ハ能寐入出合ふ
 人も見へざる。忽果と合圖の鉄炮を一声響くを程こそわは金を鳴り
 鼓を打大軍一度ハ打て入ハ楚の軍中ハ思ひも寄らざる上を下人と返りし。

鎗と戟とと騷動と項梁の宿酒醒さすべ起らるるも能せん諸
 人あまを相扶け轅門まで伴ひ出しかのまに馬に乗るるを秦の大將
 孫勝の急蒐より項梁と一刀で斬りける英布等走り回り敵の
 小勢ぞ蹶ると禁止とど大勢の乱立る習とて耳の更聞入
 るも彼是自ら踐踏し討る者數を知らず皆我先と逃失て意
 隨小走りり秦の兵の勝れ無り夜の明るまで追殺し翌日乃ち外黃
 より陳留へ入陣を取り勢ひ大ひ振ひけり斯り一呼へ秦の大將王離
 涉間と云る者新手を引て加りけり益猛威盛なり楚の勢恐懼
 足らざると直趙へ押寄んと軍議をなして居りける沛公此由を
 聞玉の急來りと救へんと爲玉所へ楚の敗軍皆散々成りければ
 カ及なきを宋義等と雍丘まで退まの余て項籍の對面し彼武信君が

討さる由を詳に告るゆを項羽の聞より大まに叫び地上の倒れて悲
 愴の我幼穉と父を喪ひ叔父の養ひよとてそ成長も一物とも
 學び天下の大義を思ひ立一の切業のまに得るもむと中道に別る
 心碎るが如くも今日より如何が爲言と声と放りて哭けるを楚増慰
 曰けり國の爲自身と相する臣子の大節を盡さるる今武信君の命
 數の如此の成ゆけども楚の大業へ己の成るる天の下風を望て附屬
 者計るは是五十萬の餘るべし余は將軍の其志を能継玉ひて士
 卒を撫て秦を滅し楚を興し武信君を追封し奉り廟を立て祭り
 玉は是將軍の大孝を名を去るる何ぞ婦女子の如く歎悲ことを
 せん項籍は是を聞き謝し云けり今先生の教る所我謹んで
 從へんと即時の軍兵を引卒し余て定陶の到りて宋義沛公と商

議して一處の陣を屯し。喪服を着孝を掛念て武信君項梁が屍を
斂り定陶の側を葬り是より又兵を進め章邯を伐んと議ししける。
此時秦の章邯の破竹の勢で直河を打渡り趙の國へ攻入れば。
趙王趙歇大なる恐懼張耳陳餘の二人の者小兵と授け打て出這を
防ぎ戦へる。然る秦の大軍の激浪の巖を撃大風の砂を卷く異
らむ勢の猛烈推來まは張耳陳餘の大なる驚怖一支も支が終夜
逃走り鉅鹿の城の楯箆りて早馬と諸國へ立援兵を乞求む章邯へ
新食の大將王離涉間の鉅鹿を圍ませ自身へ其南の居る通道を
築せし。關中より兵糧を運送させ晝夜を分を攻りける。是
より先小楚の懷王の齊國の使者よりける高陵君が宋義の遇ひ武信
君が軍の攻守敗れんと云けり。細寮の奏を聞玉の心中の危ぶ

思召所へ忽注進ゆりける。介て定陶の軍破と武信君項梁も果敢
なく討と玉のねと以聞まへ大なる恐懼項羽呂臣沛公等の兵を召せ
玉の肝貽の都を御動座りて彭城へ遷玉介ても項羽等の諸
將へ不日彭城の聚會の軍役の進退をなせ武信君が討とる。
一條を詳の奏しける。懷王を聞玉の放聲て哭玉へ項羽謹で
奏する様今武信君新亡御方の銳氣折さる。介るの章邯が大軍の
鉅鹿の城を取圍息を絶せ攻るとは趙の國り破る。直ち此
所へ攻來らん居るが敵を待んより。臣等兵を引卒し趙を救ひ秦を
伐ん我大王の此處小犄角の勢を張玉へと諫まは懷王へを聞玉にて
最もと思召玉の。尚も諸將を勇ませんと先勸賞を行はし。呂
臣を以て司徒とみ。叔其父の呂清を令尹の官とみ。沛公を以て碭

郡の長とみさしめ兼て武安侯の封ト玉の碭郡の兵を統理さしむ。
 此時の尚齊の使者高陵君此地ありけるが先宋義が未然の機と
 論ト少も違つざりしを頗の稱讚為しけるゆゑ懐王の宋義を召
 玉の先試の軍慮の支と商議玉より一箇とて理のめらけり無程の
 大の悦び玉のつ上將軍と為玉より項羽と魯侯の封ト玉の次將軍と
 為まじり叔范増と末將と。其他の諸將の悉く宋義の部下の屬
 玉の號して御子冠軍と一日を擇て發向せよと御言告せ玉のけり諸
 將の此旨を領承し首途の用意を為しつるけり。

訂正 繪本漢楚軍談初輯卷之四
 補刻

